



2021年 第37回写真の町東川賞

受賞者発表
授賞式及びフォトフェスタ案内

写真文化首都
北海道「写真の町」東川町

第37回 写真の町東川賞受賞作家

＜海外作家賞＞ 対象国：中国

モ・イー
莫毅氏（Mo Yi）

受賞理由：『1m、私の後ろの風景』（1989 年）、『私は犬だ』（1996 年）及び一連の作品に対して

＜国内作家賞＞

せ と まさと
瀬戸 正人氏（SETO Masato）

受賞理由：展覧会「記憶の地図」（東京都写真美術館、2020 年）に対して

＜新人作家賞＞

いわね あい
岩根 愛氏（IWANE Ai）

受賞理由：写真集『KIPUKA』（青幻舎、2018 年）、展覧会「あしたのひかり 日本の新進作家 vol.17」（東京都写真美術館、2020 年）ほか、一連の発表活動に対して

＜特別作家賞＞

しらいし
白石 ちえこ氏（SHIRAISHI Chieko）

受賞理由：写真集『鹿渡り』（蒼穹舎、2020 年）に対して

＜飛弾野数右衛門賞＞

なか の まさたか
中野 正貴氏（NAKANO Masataka）

受賞理由：展覧会「東京」（東京都写真美術館、2019 年）、『東京』（クレヴィス、2019 年）、『東京窓景』（河出書房新社、2004）、『TOKYO NOBODY』（リトルモア、2000 年）ほか、東京を撮り続けてきた作品に対して

第37回 写真の町東川賞審査会委員（敬称略／五十音順）

安	珠	（あんじゅ）	写真家
上野	修	（うえの おさむ）	写真評論家
神山	亮子	（かみやま りょうこ）	学芸員、戦後日本美術史
北野	謙	（きたの けん）	写真家
倉石	信乃	（くらいし しの）	詩人、写真批評
柴崎	友香	（しばさき ともか）	小説家
丹羽	晴美	（にわ はるみ）	学芸員、写真論
原	耕一	（はら こういち）	デザイナー

第37回 写真の町東川賞審査講評

第37回写真の町東川賞審査会は、2021年3月3日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞73名、新人作家賞88名、特別作家賞26名、飛弾野数右衛門賞38名、海外作家賞29名。コロナ禍によりノミネート数が減少するかと予想されたが、蓋を開けてみれば昨年から約1割の増加となった。

例年どおり、午前中は写真集や資料をじっくりと閲覧した。午後から、合計205名の作家より、5つの賞を選ぶ審査に入った。今年は審査委員2名が欠席し、事前に推挙した候補者を審査に反映させていった。

国内作家賞は最終段階で三つ巴の接戦となり、議論と投票の結果、瀬戸正人氏に決定した。日本人の父とベトナム人の母の元に生まれ、タイと日本を行き来しつつ、アジア各地の人々の日常・風土・社会を捉えた半世紀以上の活動を編んだ展覧会『記憶の地図』は、「記録」のみならず「記憶」を紡ぐメディアとしての写真を照らし出すものでもあった。デビュー作の「バンコク、ハノイ1982-1987」から最新作「Silent Mode2020」にいたる各シリーズの、趣向を凝らした展示も大きく評価された。

毎年、混戦かつ激戦となっている新人作家賞は、岩根愛、齋藤陽道、田川基成、林典子、水谷吉法、山元彩香の各氏が最終段階まで残り、議論と投票を繰り返した結果、岩根愛氏が選ばれた。写真集『KIPUKA』、書籍『キプカへの旅』、緊急事態宣言下の春に撮影した新作を含む展覧会「あしたのひかり 日本の新進作家 vol.17」など、トータルな活動が決め手となった。伝統的な写真のドキュメントの手法を踏まえつつ、その枠組みを超えていくダイナミックな展開は、まさに新人賞にふさわしいものであろう。

特別作家賞には、冬の北海道、道東の光景を、独特なモノクロームのトーンのなかに封じ込めた写真集『鹿渡り』を制作した、白石ちえこ氏が選ばれた。浜辺を飛んでいく渡り鳥や、凍った湖を渡るエゾシカの群れが浮かび上がらせる静謐な自然は、土地の固有性を語る。北海道をテーマ・被写体とした作品を撮ったという、特別作家賞の規定にぴったりと合致する作品であるといえよう。

飛弾野数右衛門賞に選ばれたのは、一貫して東京を撮り続けてきた中野正貴氏である。集大成展「東京」が開催されたのは2019年だったが、誰もいない東京の姿を写した代表作『TOKYO NOBODY』などが捉えた光景が、コロナ禍によって、また新たな意味を孕むことになったことが話題となった。時代による

意味の変化を映し出すのも写真の独自性であり、長年にわたり地域を撮り続けた作品を対象とする飛弾野数右衛門賞の意義を再確認する機会にもなった。

海外作家賞は、菅沼比呂志氏の入念な調査に基づいた説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国の中国から、莫毅氏が選ばれた。従来の写真のあり方を転覆するような作品は、中国におけるオーソドックスな紀実写真から観念紀実写真への転換を体現するものでもある。写真をメディアムとして用いつつ、ビジュアルな実験を繰り返してきた一連の活動が評価された。

例年は、円卓を囲んでの審査だったが、緊急事態宣言下での開催となった今年は、感染症対策として、広い空間で大きなテーブルをはさみ、マスクをつけての審査となった。とはいえ、議論を尽くして決定していく過程に、まったく変わりはない。昼食が審査会場で弁当となったこともあり、その時間も含め、熱心に資料を閲覧する審査員も多かったことを書きとめておこう。

コロナ禍の年として記憶されるであろう2020年は、写真やカメラにとって逆風となるような出来事も少なかった。そんな中でも、例年どおり無事審査が行われたのは、1985年の「写真の町宣言」から今日に至るまでの、歴史の厚みの賜物だろう。いうまでもなく、それは、東川町の人々の多大な努力と共感があつてのことである。例年にも増して、東川町の人々への感謝の気持ちが込み上げてきた今年の審査を、忘れずにいたい。

写真の町東川賞審査会委員 上野 修



第37回写真の町東川賞 <海外作家賞>

モ・イー
莫毅 (Mo Yi)

中国・浙江省在住

1958年、中国・チベットに生まれる。元々サッカー選手だったが、そのキャリアを断念。'82年、初めてカメラを手にし、文学や絵画のように、写真を通して自由な表現の世界を目指す。'84-87年、父親世代のポートレートを表した個展「父親」（'87年天津市群衆芸術館での大型サロン展）でデビュー。当時の美術界で描かれていた父親世代の力強さや優しさなどからは距離を置き、ぎこちなさ、歪みなど複雑な人間性を表し、新たな視点を示した。'89年のグループ展で発表した「1m、私の後ろの風景」（天津市中心公園展示ホール）は、カメラを首の後ろの襟の部分に設置し、レンズを後ろに向け、5歩歩くごとにシャッターを切るというパフォーマンスアートから生まれた。そこには、天安門事件前夜の人々の憂鬱、孤独といったものが映り込んでいる。残念ながら、展示開始の2日後、作品は会場から撤去される。'95年に雑誌『大衆撮影』で発表した「犬の目の写真」では、カメラにモーターを付け、三脚に装着して、それを逆さまにして持ち歩き、もう一方の手でレリーズを持って、街を歩きながらノーファインダーでシャッターを切っている。「犬の目で見た世界」と誤解されることが多かったので、タイトルを「私は犬だ」に変更。物事をはっきりと言えない人は動物と同じで、世界を見る必要がないという考えが本作の手法につながっている。'97年に発表した「レッドフラッシュ - 私のいる風景」や、'04年の「レッドフラッシュ - タカコの赤いドレス - 北京を歩く」、'11年 の個展「赤色の風景」（Zen Foto Gallery、東京）では、これまでの手法にフラッシュと赤いプラスチック板を使って、フラッシュの届く世界を赤色に染める作品を発表している。中国において赤色がもつ特殊な意味、政治や時代と人々の精神的な関係性を考察している。写真家として、写真というメディウムのみならず、常に個人と、社会、国家のあり方を問う作品作りを続けている。

<作家の言葉>

突然に受賞の連絡が来ました。中国の国内では、私が権威のある賞に評価されることはあり得ないことです。最近の中国写真は、様式にこだわり、現代アートのアクセントで、作り込んだ写真が好まれます。でも、驚きませんでした。私の仕事は、写真表現領域の開拓において重要な役割を果たしてきました。2000年以前、ポストモダニズム的な芸術思想をもって、実験的で、中国の現実を反映するような写真を作る作家は、私以外には存在しませんでした。今回、私の最初の喜びは、80年代生まれの研究者で写真家の高岩くんと交流でした。私が試みた写真表現は、精神的な意味で言うと、「PROVOKE」だと言ってくれました。彼は、私にとって、世代を超えた真の友です。彼に推薦されて、とても嬉しく思いました。そして、嬉しい気持ちが続きます。東川賞の審査員の方々は、中国にいらっしゃっていないので、中国の現実をよくご存知ないはずですが、私の作品を通して、その息吹に触れていただいたのでしょうか。私の作品が、写真の歴史的文脈を踏まえ、地理的な条件や物語を超えて伝わるのだと確信できた出来事となりました。紀実という手段は、物語ではなく、人間の共通する感情と精神を伝えることができます。民族や国境の壁を越えて友人の皆さんに認められたのは、私には最高のプレゼントであり励みになります。感謝の気持ちで一杯です。

莫毅
2021/4/11



「1m、私の後ろの風景」より
from the series "1m-The Scenery Behind Me"
1988



「1m、私の後ろの風景」より
from the series "1m-The Scenery Behind Me"
1988



「私は犬だ」より
from the series "I am a Dog."
1995



「私は犬だ」より
from the series "I am a Dog."
1995



「レッドフラッシュ - 僕のいる風景」より
from the series "Red flash-Me in my scenery"
1997



「レッドフラッシュ -Takako の赤いスカート - 北京を歩く」より
from the series "Red flash-Takako's red skirt-Walking in Beijing"
2004



第37回写真の町東川賞 <国内作家賞>

せ と ま さ と
瀬戸 正人 (SETO Masato)

東京都在住

1953年 タイ、ウドンタニ市生まれ。'61年 父親の故郷である福島県に移住。'74年 東京写真専門学校（現在の東京ビジュアルアーツ）在学中に森山大道と出会い、写真作家を志す。その後、18年間、深瀬昌久のアシスタントを務め、'81年に独立。'87年に自主ギャラリー「Place M」を開設。

'88年、生まれ故郷のタイ・バンコクと母の親族の住むベトナム・ハノイを約20年ぶりに訪れて撮影する。街と人々を描くドキュメンタリーでありながら、作家自身のルーツをたどるパーソナル・ヒストリーでもある写真集『バンコク・ハノイ』（アイピーシー、'89年）を上梓。日本写真協会新人賞を受賞。'93年にはアジア諸国や中近東など様々な地域から東京に移り住み、一般的な集合住宅で暮らす人々の居住空間から国際色豊かな東京の一面をとらえた写真展「部屋 Living Room, Tokyo」（Place M、'92-'94年）で、東川賞新人作家賞を受賞。'96年には写真集『部屋 Living Room, Tokyo』（新潮社、'96年）、コンパクトカメラのサイレントモードで電車に乗る女性を至近距離で撮影し、無表情の中にその人のリアルな姿を浮かび上がらせたポートレート写真集『Silent Mode』（Mole、'96年）で、第21回木村伊兵衛写真賞、写真の会賞を同時受賞。'99年には幼少期の記憶を綴りアジアの多様で複雑な歴史を映し出しつつも、自身のルーツを探す旅の記録ともいえるエッセイ集『トオイと正人』（朝日新聞社、'98年）で、第12回新潮学芸賞を受賞するなど、多彩な才能を発揮。

個展「記憶の地図」（東京都写真美術館、'20年）では、デビュー作「バンコク、ハノイ1982-1987」から、最新作「Silent Mode 2020」にいたる各時代の代表作を一望できるような形で構成。半世紀以上にわたりアジア各地の人々や暮らし、風土や自然、また社会を見つめた作品制作を続けている。

<作家の言葉>

東川町が、写真の町として旗を高々と揚げた1984年、写真家として立ち上がろうとしていた僕にとって、目指さなければならない場所となりました。それから40年近い時を経て、ここに「国内作家賞」を受けて、たいへん光栄に思います。はじめて東川町を訪れたのは1992年で、僕の先生である深瀬昌久氏が「特別賞」を受賞されたのですが、授賞式の直前に不慮の事故で倒れられたため、僕が代理で出席させていただきました。それから何年かして、今度は僕が「新人賞」を受賞し再訪しました。夏の盛りの東川町の田畑が青々として、民家の庭先に白百合が揺れ、その忘れがたい夏の匂いがそこここに漂っていました。大雪山からの雪解け水とのこと、水道水が冷たくとても美味しいのに驚きました。その時のあいさつで「2度あることは3度ある、また来るつもりです」と言いましたが、それが今実現しました。再再訪を楽しみにしています。

瀬戸 正人



「部屋 Living Room, Tokyo」より
from the series "Living Room, Tokyo"
1989-1994



「Binran」より
from the series "Binran"
2004-2007



「Picnic」より
from the series "Picnic"
1995-2003



「Picnic」より
from the series "Picnic"
1995-2003



「Silent Mode 2020」より
from the series "Silent Mode 2020"
2019-2020



「Silent Mode 2020」より
from the series "Silent Mode 2020"
2019-2020



第37回写真の町東川賞 <新人作家賞>

岩根 愛 (IWANE Ai)

東京都在住

1975年東京都生まれ。'91年単身渡米、ベトロリアハイスクールに留学し、オフグリッド、自給自足の暮らしの中で学ぶ。帰国後、アシスタントを経て'96年より写真家として活動始める。

'06年、初めて訪れたハワイで、ハワイ最古の日本仏教寺院であるハマクア浄土院に出会い、日系移民の歴史を知る。ハワイの寺院で開催されるボンダンス(盆踊り)の熱気に魅せられ、以来ハワイに通い、ボンダンスを巡る。

'11年、ハワイ各地のボンダンスで生演奏される『フクシマオンド』の原曲が、東京電力福島第一原発事故により避難区域となってしまった地域の盆唄、相馬盆唄であることを知り、東日本大震災後の福島へ取材を重ね、福島県三春町にも拠点を構える。

1930年代にハワイの日系写真館で葬儀などの集合写真撮影に使用されていた回転式大判パノラマカメラ「サーカット」を修復し、福島の避難区域とハワイの移民一世の墓地を360度撮影するなど、移民を通じたハワイと福島の関連をテーマに、'18年にハワイ島で発生した大規模な溶岩流や、美しくも厳しいハワイの自然を織り交ぜ、'18年初の作品集『KIPUKA』(青幻舎)を発表。第44回木村伊兵衛写真賞、第44回伊奈信男賞を受賞する。ハワイと福島県双葉町の盆唄奏者の交流を描いたドキュメンタリー映画『盆唄』(中江裕司監督、テレコムスタッフ)をアソシエイト・プロデューサーとして企画、'19年に公開。盆唄を通じたハワイと福島の橋渡しを続けた足掛け12年の活動の様子を綴った書籍『キブカへの旅』(太田出版)を出版。'20年に参加した「あしたのひかり-日本の新進作家Vol.17」(東京都写真美術館)では、福島の避難区域内に咲く桜と、コロナで人影の消えた三春、北上、遠野、一関、八戸の夜の桜を撮影した「あたらしい川」を出品。同時に作品集『A NEW RIVER』(bookshop M)を刊行する。

<作家の言葉>

『KIPUKA』とは、ハワイ語で溶岩流のあとに島のように残った植物のことで、その種子が再生の源となる、「新しい命の場所」を意味する。

福島からハワイへ、移民とともに渡った盆唄『フクシマオンド』を追い、旅を続けてきた。12年を越えた取材期間は、盆唄の流れる果てなき時間を知ることであった。

天明・天保の大飢饉により農民が激減した相馬藩に招かれ、越後から相馬へ、多数の相馬移民が入植した頃、相馬焼の陶法を学んで越後に持ち帰った人物がいると知った。やがて松郷屋焼として定着した徳利に、酒や醤油、焼酎を詰め、越後から北海道へ、開拓移民と共に海を渡ったと知ったのは、思いがけないことだった。

消失と喪失の繰り返しの中で生き続ける唄を、世紀を超えて継いでいく人たちの熱意は、長い時間の中で私が生きる時間がここであること、それが奇跡のようなことだと気づかせてくれた。この度の東川賞新人賞受賞は身に余る光栄です。

岩根 愛



KIPUKA

Shosuke Nihei, Kailua Camp, Kailua, Hawaii
2016



KIPUKA

Ookala, Hawaii
2006



KIPUKA

Paia Mantokuji Soto Zen Mission, Hawaii
2015



KIPUKA

Kalapana, Hawaii
2010



A NEW RIVER

Tenshochi, Kitakami, Iwate
2020



A NEW RIVER

Takashiba Dekoyashiki, Koriyama, Fukushima
2020



第37回写真の町東川賞 <特別作家賞>

しらいし
白石 ちえこ (SHIRAISHI Chieko)

東京都在住

神奈川県横須賀市生まれ。旅の中で写真を撮りはじめ、これまでにマレーシア、インドネシア、タイ、インド、ネパール、パキスタンなど世界各国を旅し、2000年代より本格的に写真の世界に入る。

'08年、旅先で見つけた“町の片隅でしずかに佇む古びた建物や、ちょっととぼけたモノたち”を収めた初の写真集『サボテンとしっぽ』(冬青社刊)を出版。その後、'20~'30年代にアマチュアカメラマンの間で流行した「雑巾がけ」と呼ばれる、プリントの上に油絵の油をひきその上に絵の具で調色をしていく古典技法に魅了される。'12年に開いた個展「ペンギン島の日々」で、自身の幼少期の曖昧な記憶を映像化した、詩情溢れるモノクロプリントを発表。後に、'15年『島影 SHIMAKAGE』(蒼穹舎刊)として、2冊目の写真集にまとめる。写真でありながら、現実離れた絵画の中のような風景が、「雑巾がけ」で表されている。

近年は国内のみならず、フランス・パリでの個展「鹿渡り SHIKAWATARI」(mind's eye gallery Adrian Bondy、'19年)や、ジョージア・トビリシで開催された「トビリシ・フォト・フェスティバル2016」など活躍の場を海外に広げている。パリで発表された「鹿渡り」は、北海道、道東でエゾシカの群れを追ったもので、'20年に写真集『鹿渡り SHIKAWATARI』(蒼穹舎刊)としてまとめられた。雪に覆われた北海道ならではの風景の中で、柔らかな光の中に包まれた鹿と作者との静かな物語が展開されている。

<作家の言葉>

このたびは栄誉ある賞をいただき、心よりお礼申し上げます

写真集「鹿渡り」の始まりは、2014年冬の北海道を訪れた時からで、2020年まで毎冬、道東を旅して撮影してきました。2011年の震災以降、閉塞感が募る中で出会った冬の道東の風景でした。真っ白な静けさの中、薄明かりに照らされた凍湖を一行になって渡るエゾシカたちの姿は、私には鮮烈な出会いとなりました。動物や自然を身近に感じながらの撮影では先人たちの自然観や、北海道の生き物たちに引き継がれている記憶に想いを馳せるようになりました。私と自然とが結ばれていくような不思議な一体感が湧き上がり、震災以後に深呼吸できた気持ちになりました。

昨年、コロナ禍の不安が増す時期に、撮影してきた写真の見え方が変わってきました。そこで、どうしても今この本を作りたい、世界中が困難な状況の今だからこそ、誰かとこの光景をシェアしてみたいと強く思い、写真集の出版を決めました。この写真集を見てくださった皆様に深く感謝いたします。

白石 ちえこ



根室市風蓮湖

Nemuro City, Lake Furen

2018



別海町走古丹

Betsukai Town, Hashirikotan

2016



別海町走古丹

Betsukai Town, Hashirikotan

2017



根室市長節

Nemuro City, Choboshi

2016



根室市風蓮湖

Nemuro City, Lake Furen

2015



根室市長節

Nemuro City, Choboshi

2018

「鹿渡り」より
from the series "Deer Crossing"



第37回写真の町東川賞 <飛弾野数右衛門賞>

なか の まさたか

中野 正貴 (NAKANO Masataka)

東京都在住

1955年福岡県生まれ。'56年より東京都在住。'79年武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン科卒業後、写真家・秋元茂に師事。'80年よりフリーランスフォトグラファーとして独立し、雑誌や広告写真を中心に活躍。

2000年に誰も見たことのない無人の東京を撮影した写真集『TOKYO NOBODY』（リトルモア）を発表。'01年同作で日本写真協会賞新人賞を受賞。'05年、ビルや民家の窓から垣間見えるシュールな東京の特徴をとらえた写真集『東京窓景』（河出書房新社、'04年）で、第30回木村伊兵衛写真賞を受賞。20代の時に憧れ、旅した'80年代初頭のニューヨーク、LA、サンフランシスコなどアメリカの風景をコダクロームのポジフィルムで撮影した写真集『MY LOST AMERICA』を'08年にまとめ、第8回さがみはら写真賞を受賞。

個展「東京」（東京都写真美術館、'19-'20年）は、誰もいない東京の姿を写した「TOKYO NOBODY」、建物の窓から東京の特徴を捉えた「東京窓景」、川を漂い水上から東京を見上げた「TOKYO FLOAT」など、“東京三部作”と言われる代表作を中心に構成し、30年以上にわたる巨大都市の変わりゆく表情を表した。また、「TOKYO NOBODY」は、現在のコロナ禍を予測したかのような、無人の東京の風景が新たな意味を孕むこととなり、あらためて注目されている。変貌を続ける世界都市「東京」を独自の視点でとらえながら作品作りを続けている。

<作家の言葉>

この度東川賞飛弾野数右衛門賞の受賞という嬉しいお知らせを頂戴しました。

新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、嘗て経験したことがない恐怖に晒され生活する中で、一筋の光明を与えて頂けました。

僕は1990年から30年余りに渡って東京を撮り続けてきましたが、その長期に渡る取り組みに対してご評価を頂けたことがとても感慨深く、艱苦奮闘が報われた想いがします。

選出して頂いた審査員の先生方、東川賞関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

東京は目まぐるしく変貌を遂げる捉えどころの無い都市と言われますが、僕は幾つかの決め事を設定することでこの大都市を理解しようと試みてきました。

東京が無人になる瞬間、様々な窓を通して見る東京、都市発展の源である川から眺めた東京、といった具合に夫々の節(ふるい)を通して考察を重ねてきました。

この受賞を励みにして、また新たな企画にチャレンジしていきます。

中野正貴



TOKYO NOBODY

Ginza
1996



TOKYO WINDOWS

Azumabashi
2003



TOKYO NOBODY

Shibuya
1992



TOKYO WINDOWS

Daiba
2004



TOKYO NOBODY

Nishiiazabu
1997



TOKYO FLOAT

Ichinohashi
2005

第37回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業2021～

<受賞作家作品展>

会期：7月31日（土）～9月1日（水） 会期中無休

時間：10：00～17：00（7月31日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円（7月31日、8月1日は無料開放）

海外作家賞……………莫毅

国内作家賞……………瀬戸正人

新人作家賞……………岩根愛

特別作家賞……………白石ちえこ

飛弾野数右衛門賞……中野正貴

●7月31日（土）

13：30～14：30 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

15：30～17：00 レセプション「受賞を祝う集い」

●8月1日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査委員、ゲスト

※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、事業が変更・中止・延期となる可能性がございます。

■■■■ 写真の町とは ■■■■

1984年、東川町に開墾の鍬がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川町は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、この若い町よりも、わずか半世紀ほど早く生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル」（通称：東川町フォトフェスタ）が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末から8月頭に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム、東川賞歴代受賞作家屋外写真展、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えていきます。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる「全国高等学校写真選手権大会」(通称:写真甲子園)では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し、「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

■■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

写真の町東川賞＜海外作家賞＞	1名	賞金 100万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞	1名	賞金 100万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞＜飛弾野数右衛門賞＞	1名	賞金 50万円

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作家を、東川町長が委嘱した委員で構成する「写真の町東川賞審査会」において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念フォーラム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、「写真の町・東川町文化ギャラリー」に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的的發展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。



フォトフェスタHP

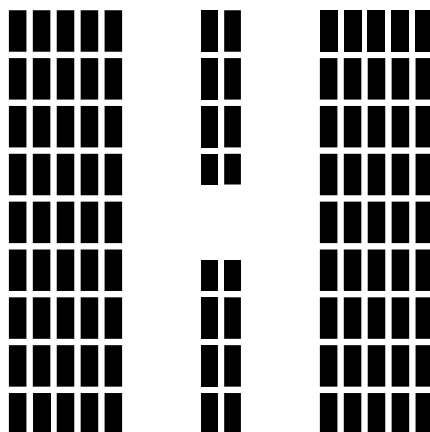
東川町 HP <https://town.higashikawa.hokkaido.jp/>

フォトフェスタ HP <https://photo-town.jp/>

🐦 https://twitter.com/Higashikawa_PF

f <https://www.facebook.com/Higashikawa.PF/>

📷 https://www.instagram.com/higashikawa_pf/



〈お問い合わせ先〉

東川町写真の町実行委員会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー内
写真の町課（担当：竹田・吉里）

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

E-mail: photo@town.higashikawa.lg.jp

<https://www.photo-town.jp/>

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家展出品作に限りません。